

高校生 の 詩 一

— 詩集「りべらる」の歩み —

薬 師 寺 大 馬

定時制高校と言えば、現在、生徒数の減少のためほとんど全員入
学に近い形になってきている。私の勤務する学校もその例にもれ
ず、以前は十六学級八百余名の比較的規模の大きい学校であつた
が、今では、十五学級六百余名とますますその数を減じていく現象
下にある。数の減少が同時に質的低下を意味することは否めない事
実で、加えて、昼間の労働をいやす間もなく、学習に取り組まな
ければならない条件下にあるため、おのずと意欲の喪失、成績の伸び
悩みといった悪循環を繰り返している。

私の受け持つ四年C組は理科コースの教育課程を進むルームで、
ルーム主任の私が少し手綱を締められると、秩序破壊をやりかねな
いようなフニキを持った者の集まりである。大学受験で頭がいっ
ぱいの者、卒業後も今の会社で十分というのんびり屋、中小企業の
低賃金にあえいで、なんとかいい条件の会社をと進路指導室へ日参
する者、中にはマンガに読み耽り学習などどこ吹く風と結構楽しそ
うな女生徒、そうかと思えば転校して来た女生徒に愛を感じ、その
家まで押しかけていく徒などいる。別の見方をすれば、自由で朗ら
かそうな空気を感じさせはするものの、やはりここにも「進学組」

と「就職組」との明らかな対立がある。この冷たい殺風景な人間の
なつながりのない空気を嫌がり、ある日突然に行方不明になって私
を悩ませたりする者のいる、そんなクラスなのである。

こうした中で、昨年七月、見て欲しいものがあると持ち込まれた
のが、西洋紙四枚に刷られた詩集であつた。クラスの冷たい空気と
進学競争の渦中にある小宮順一、吉田政司という生徒が、仲間から
孤立し、詩を語り、人生を語り、文学論や恋愛論をぶちまけること
で自分を守り、人間性を守ろうとして悩んでいる姿を、この詩集の
中に発見したのであつた。

後に、彼ら二人とそれに途中から詩集の仲間に加わつた原勝政の
三人は、同人誌としての詩集の刊行を続けながら、推されて生徒会
誌の発行に情熱を傾け、互いに議論を聞かせながら活動していくの
である。詩集を通して、議論を通して、活動する姿を通して、彼ら
の内面世界をかいま見た時、「奇怪な時代」と思う反面、教師とし
ての重大さを悟らされたのである。そして、私は「詩人」「批評
家」「人生相談係」「秩序保持者」として、縦横の活躍を余儀なく
されたが、無能さをさらさねばならないなさせなさに、何度か折

しそうになりながら現在まで持ちこたえてきたのは、実に彼らの詩に対する「情熱」であったと考えるのである。

「詩の創作指導上の問題点」などと言えるものを持ち合わせない私であるが、彼らの詩の成長過程を通じて「何か」をつかみたいと思ひ、そして、彼らの詩が「どのように評価されるのか」を、稿を進めながら考えたいと思っている。

(一)

次の三編の詩を読んでいただきたい。

白と黒の闘い

四年 小宮順一

ほの白いうす絹のなにゆえにはかなく
影は拡がりゆくのか、黒く、深々と、
霧の浮かぶ川辺にゆらり
水気を吸っては沈みゆく。
そして、すっかり潮解して、
水面に触れるや
獣の形して走り去る。

誰かは誰かを思い、
誰かは誰かを捨て、

遠い地平線の無い国を旅しているのであった。

とてつもなく広がったものを摘めなくて、
粗末な覗き眼鏡をかざしていた。

想う心はアルミ貨幣の音たてて、
モンゴルの裸地を転がるのであった。

死はすぐ側から流し目を送ってくる。
ぱっくりと心を切開かれた彼方よりの屍。

その中を、
ひび割れた土壇踏み、銃なしの狩人は行く。
かつての、ほの白いうす絹の末裔を捜すため、
口惜しくも獣となって走り去ったものを追ひ。

可愛い人

四年 吉田政司

あめーば状のびすとるが泳いでいます
その口径で私の微かな秘密を叩きます
病んだ小さな肺はその弾丸に血も出ません
生きているのでしょうか
こんなに炎が燃えているのに
びすとるは一片も溶けません
おとぎ話が笑っています
でたらめを言うなどその口ばしで
私の目をつつきます

0、2の視力が0になりました
あやつり人形です

青白い影法師のうらぶれです

あのような言葉を

バイブルにしたのが悪かったですでしょう

「愛」には空洞しかないのです

サタンだったのです

鉛色の鎖を引きずって歩きます
今は黒い一本の竹のつえが

なによりのごちそうなのです

もう言わないで下さい

私も黙っています

それしかできません

焼けただれた私の故郷

それは真赤な太陽のふところ

安閑と雲を追っていた私の眼の前で

急に大爆発した炎の玉

草も 木も 湖も

みんな陽炎のように蒸発している

取り残された熔鉱炉の中の石と砂と大地

その上でぼんやりと空を仰いでいる私

血管が破裂する

髪が火を吹く

肉体がこげる

さあ……どこかへ逃げなければ

思考力を失った頭脳が愚痴をこぼしている

神経は飄蕩して身体が震え

とにかく歩けと足に命令する

その足も……焼けただれて黒ずんだ骨に

四年 原 勝政

肉片がこびりついているだけなのだ

黒い大地は一面ひびわれた沙漠

裂け目から赤い溶岩が沸騰している

焼け尽くされた私の故郷

〃俺はどうして生きているのだ〃

白骨となって灼熱の沙漠を彷徨いながら

私はひとりつぶやいてみる

以上の三編の詩は、私の指導している生徒の作品で、彼らを作る詩集「りべらる」から採ったものである。ガリ刷りの粗末なものから出発してその年輪すでに二才、その間、私は詩の創作指導は高等学校では必要ないという考えに立ってはいたものの、個人的に助言を求めてくる生徒をむげに断わりきれず、指導の困難さをかこちながら見守り続けて来た。

三人の部厚いノートやレポート用紙に書かれた数多くの詩、ガリ刷りの二十ページ余の詩十三巻を手にして、少なからず戸迷いながらもその重みを貴重なものと思う。その重みが私の肌にしりと感ぜられたとき、現代国語―わけても作文教育の領域に、詩を自己表現の手段として拡大しなければと思うようになった。なぜなら、詩の鑑賞から得た修辭を自分の修辭の中に還元するということで円環的に自己の表現領域を高めようと考えるからである。

もともと彼らの詩の創作指導の出発点が、今述べたようにことに

あったわけではなく、むしろ三人の中の一人は、生活指導に用いるつもりから出発した。しかし、詩を使って生活指導をするとかえってマイナスになり、自分の本当の姿を出さなくなるのではという疑念がわいてきたので、このことはあっさりと捨ててしまった。それよりか、言語感覚あるいは思想への目ざめを通して、自己の生活の中にみずからの主体性を確立させて行こうという目標に切り換えた。

先にあげた三編の詩が、現代高校生の代表的な作品であるかどうかは別問題としても、一般の高校生の感傷性とは異にして、一人一人の作品は非常に個性的である。一つは「豊かな感受性」が、一つは「アイロニー」が、いま一つは「渴れた感情」が見出せる。もちろん国語教育の立場からなれば、その表現の多くは欠陥を持っている。散文では見出しえない論理を無視した語法が多く見出せる。しかし、それは現代詩のもつ一つの表現に共通したもので、散文での論理とは違った角度から見なければならぬ問題である。ただ注意したいのは、いわゆる非論理的な表現が（そう多くはないが）文章の中に出てくる事実である。それは非論理性が、現実には内的真実を語るという一つの修辞として文章に生かされることで、論理性を持ち得ているということになるかと思う。そして、自己表現を詩的表現を通してなし得る生徒があるとすれば、そこに一つの普遍性を持ってきたという解釈が可能かとも思う。

いづれにしても、これまでに至った彼らの足跡を通して、詩がどのように高められ、創作指導上何が問題となり、詩を作文指導への接点として扱えられるかどうかを考えてみたい。

この稿では、主として作品の資料集として提出し、生徒の生の姿をつかんでいただけたらさいわいである。

(二)

私の学校には、文芸部の発行する「ともしび」と生徒会誌としての「窓灯」があり、この二つの雑誌には数多くの詩が取り上げられている。実は、このことは高校生の詩への接近を物語るものではないが、ただその大半は力強い、文学的な意識のもとに書かれたのではなく、単に自己の生活感情の表現手段として、詩の形式を借りたという無自覚的なものである。

誰もが信じたいのに
誰もが信じられない

いったいどういうことなのか

本人の前では言わず

人にはその人の悪口を言う

本当にいやなことだ

現に言われたこともある

やさしい人だと思っていたのに

大きなショックだった

なぜあんなことを

誰をも信じたいのに

誰もが信じられない

悲しいことだと思っ

「ともしび」 女子

この詩が示すように、この年代特有の悩みと哀傷が中心で、ほと

などがこういった類のもので占められている。詩が即物的に構築され、そこに詩的感動がもりこまれるということはごくまれである。なぜこうなるのかということであるが、これは詩教材を通しての鑑賞が近代詩的な抒情性のみに終始して、現代詩的な発想へ発展させない指導上の大きな問題点がそこに横たわっていて、それ以上のことは生徒の個々に期待するというで放置していたのが原因かと思う。こうしたことは私の求めたアンケートには、はっきり表われている。

- ① 詩を読むことが好きか。
- ② 感動を受けた詩があるか。
- ③ 好きな詩人はだれか。
- ④ 詩を書いてみたいと思うか。
- ⑤ 詩を書き続ける気持があるか。

アンケートの主要項目だけあげてみたが、これに対する解答は、およそ次の通りである。①に関して「好き」と答えた者は、調査人数百二十六名中七十五名、約六十パーセントの数が上げられる。②の項目に関してみてみると、藤村を筆頭にいわゆる近代詩にその数が集中しているのである。中には、谷川俊太郎とか津村信夫といった現代詩に興味を抱く者もあるが、それは極めてまれである。また④に関しては、「詩を読むことが好きだ」と答えた者の全部が書いてみたいと答えている。しかし、現在詩を書いている者は全体の二十八パーセントにしかならない。詩は好ましい文学であるとしても、やはり、いざ筆を執って書くということになると、それがいかに至難なことかがわかる。かりに書けたとしても、せいぜい感傷的なもの

か、ないしは自己満足に過ぎないものである。

こうした中で三人は、飛び抜けた存在である。一般に定時制の生徒の作る詩は生活詩的なものが多く、もちろんそれはそれなりに意義はあるのだが、自己の生活体験を越えた詩的なイメージを持つ詩は少ない。時折個人的に指導を乞う生徒もいたが、それともせいぜい自省の姿しか発見出来なかった。だが、先にあげた三人は文芸部に属そうとするわけではなし、三人三様の考え方で詩への情熱を傾けていることを知って、互いの何かを引き出させ、そこに個性的な萌芽を目指しての指導が可能であると私は考えた。特に三人の中の一人が、「中学の時、文芸クラブには入ってみたが、その少女趣味的な明るさと陰うつさがいやですぐさまやめた」と言い、また「文芸部誌や生徒会誌の詩に対しての失望、批判が活発な詩作活動を支える原動力となった」と述懐する。受け取り方によっては残酷なまでのこのことばの中にある反発力が、彼らの創造力となって詩への表現を駆りたてるのだと思う。

(三)

ここで、彼らの作る詩集「りべらるる」がどういう動機からスタートしたか、少し長い文章であるが記してみよう。

詩集の足跡

〔動機〕

小宮順一

昭和四十一年度の二学期に吉田がクラスメイトであった私に、それまで日記的に書いていた、大学ノートに収めた詩を見せた。私は急に詩に親近感をおぼえて、簡単なものを数編作ったが、長くは続かなかつた。しかし、その直後に私が中学校以来文通していた宮島

正吾から、創作小説と詩数十編が届き、そこで私と吉田は相談して、ガリ刷りの冊子を発行して親しい者同志で見せ合い、互いに批評したらということになったが、実行には移されなかった。

その後村上武志が日本文学全集を買いはじめたことから、私と彼は生まれて始めて文学の面白さがわかってきたのである。そして昭和四十二年度の一学期も終わる頃、再び宮島から「心の旅路」「心の断片」などの連詩が届いたのを機会に、ようやく実行に移されたのであった。

〔発展〕

第一集は、宮島、吉田、私の三人だけで、吉田と私の二人がごく親しい仲間に配布したのである。第一集のことをその後その他の友人に話すと、面白いことだ、我々にも見せてくれと、友人、友人の友人、そのまた友人へと広がって行き、今では編集する者が顔も知らない仲間も数人いるほどに発展してきた。

急速に仲間が増えるに従い、その主旨も変わった。最初は三人がノートを回し読みするより、一度に見て比較批評するということがあったが、何しろまだまだ未熟なため他の仲間も気楽に投稿し始めて、一種の集団の思考交換の場という性格をもってきたのである。だが今年からは、宮島、吉田、私そして新人の原勝政などが詩の進歩発展をより以上に望むようになり、現在は、

① 仲間のあいだの思考交換

② 詩に対しての深化を深める

が柱になって、そのためには気楽な投稿を維持しつつも、詩を真剣に相互批評して少しでも向上することを願いつつ、ここに至ったのである。

—詩集第七号より—

私には、初めから詩の創作指導のための明確な目標があったわけではないのだが、彼らは彼らなりに、詩の指導の原則的な「思想へのめざめ」をつかみ取っていたのである。そこで、私はもう一つの面「言語感覚を鍛える」ことに焦点をしばればよいことになるのだが、この点に関しては今もってあいまいな指導になっていることを反省している。

詩集第一号から第十三号までの作品を見ていて、大きく作風が変化していくのは第七号からだと思えるので、この稿では第一号から第六号までの詩を選択してみた。

妹に

小宮順一

妹よ

か弱く稚い我が妹よ

暴君だった兄にいじめられた妹よ

おまえも今は一人旅か

おまえに救いの手もさしのべなかった

兄を恨んでくれ

妹よ

明るさの中に羞恥を含んだ

笑顔をどういおうか

荒涼たる社会に立たされ

どまどっている妹よ

真実だけを見よ

妹よ

嘆き悲しむ我が妹よ

社会の冷酷な洗礼を受けた妹よ
だんだんと強くなれ

ほらおまえの友達が呼んでいる

寒い空に

冬の日は何も写さない

影さえ薄く冷くしてしまふ

その下で小さな黒い虫が

一見くだらないような努力を

むやみやたらにしている

その虫は闇にはいつては嘆き

陽の当る場所に出ては

喜んでゐる

金を追いかけて回して

笑い泣いたり

想像もできない

辛苦をなめては

無意味に死んでいく

「そんなことはどうでもいい」

と言わんばかりに

今日も冬の陽は

黙って地を輝かしている

(第一号、42、7)

吉田政司

夏の宵

夏の宵は

じりじりと獲物に歩みよる獵犬

慎重に目には見えぬ程の動きで

いつの間にか闇となる

かすんだ星があえぎあえぎ

光りつつ

何かを語ろうとするが

うじ虫どもには聞く耳もなく

ただ汗を流して苦しむのみ

夏の宵に吹く風はなく

夕なぎの世界にあるのは

怠惰のみ

このような時

いにしえの人と語りたい

孤独

太い腕が私をつかみ

大空へ放り出した

蒼く光りながら飛んで行く私を

(第二号、42、8)

小宮順一

(第三号、42、9)

小宮順一

白と灰色の雲は嘲笑い

黄色の雲は冷たく突き放した

最後の紅の雲だけが

優しく包んでくれた

暖い部屋 柔い寢床

それも束の間の夢

真黒な雷親父が

大音声を張り上げ

辛らつな電気ヤリを投げつけ

紅の雲を殺してしまった

またもやはじき出された私は

大回転に加速度をつけながら

どこまでも飛び続けねばならない

破裂寸前の鼓膜を

うららかな春のせせらぎの音と

楽しげな仲間の笑い声が

かすかに震わせた

「あっお母ちゃん流れ星」

愛くるしい子供が叫んだ

(第四号、42、10)

俺の世界つまり狂人の世界

吉田政司

ただ黒い雲だけが

無気味に光っている

そこは俺の世界 狂人の世界

自分が自分でなくなつた

絶望の世界

青い海は沸騰し魚どもは死にもだえる

狂った川がごうごうと流れこむ

白い船が無惨にも底を見せ

倒れている姿だけが目に映る

そこは俺の世界 狂人の世界

自分を見失つた世界

世捨人の世界

赤い壁に囲まれ窓ひとつない部屋

ぐるぐる回転しガンガンとうなる

鉄塊の部屋

そこは俺の世界 狂人の世界

望みを放り出した世界

悪夢の世界

(第五号、42、11)

旅人

吉田政司

去年も来たよ ちようどの頃

故郷から 粉雪と冷たい風をつれて

暖かそうな君が好きだからと言って

太陽は冷たく青く塗れ

空は真赤に広がり鳥の姿は見えない

燃えたその火に溶かされてもかまわない
君のそばにいられるならと

昨日も来たよ ちょうどこの頃

故郷の川の流れに乗って

土のおいと訛りのある言葉をつれて
さびしそうな君を見ていられないからと言って
弱々しそうな君がかわいそうだからと

明日もきつと来るよ ちょうどこの頃

故郷の母の笑顔をそつと風呂敷に包んで

満員のバスに乗ってやって来るよ

君が楽しそうだからと言って

君があんまりうらやましいからと

来年もきつと来るよ ちょうどこの頃

故郷の父の励ましの声を一杯リンゴ箱につめて

空をまっすぐ飛んで来るよ

君が悲しそうだからと言って

君がそんなに涙を流すからと

いつの日もいつの年もきつと来るよ ちょうどこの頃

君がいないとさびしいからと言って

いちよう

小宮順一

一面に積もる枯葉の中にかがみ込み

表面を被う葉を一枚ぼちちり取り上げる

(それはまだ) かつてのつややかさを残し

なめらかな手触り

みずみずしい香水があたりを征する

その下の葉をもう一枚取り上げる

陽の光を再び浴びた事をさも嬉しそうに

もう全体に堅い筋の浮き立った身体を

震わせる

そしてまたその下の葉を取り上げる

彼女は一瞬目がくらんだらしく

ジッと固くなっていた

やがていかにも迷惑そうに

険のある目で私をにらむ

私はそれ以上枯葉を取り上げる事を止して

目の前のいちようの大樹の幹を見やり

立ち上がりながら その焦点を

ゴツゴツした(それでいて油ぎった)

表皮をたどらせながらずうっと上方に移す

そこでは蒼空が枝々の侵入を受けていた

四

第六号までは、発想がほとんど生のままに出ていて、詩的な表現にはほど遠い位置にある。この詩集に残されている私の批評は、こういう点に気づきながらも、どうすればよいかということとはほとんどふれていない。たとえば、全体的な問題点として、

「それぞれ個性を持った詩がいっぱいである。お願いしたいことは、詩のために詩を書かないで欲しい」ということである。自分の評えたいものが何であるか、よくつきつめてみよう。いつか詩の書けない時が来る。そこからどうして抜け出すか、悩むがよい。そうした時、本当の詩が書ける。」

(第四号)

また、

「今回は個々の作品にとらわれず、全体的な問題として取り上げてみた。類型的な傾向を見せ始めている。個人の感情に密着し過ぎないで、一般的なものとしてよんでいきたい。个性的であることが、普遍的であるように努力しよう。」

(第五号)

あるいは、

「多作ということはひとつの才能かもしれないが、一度にたくさん作ろうと考えない方がよいと思う。それより、主題の凝集化、表現を見つめる意味で一つ一つの詩を確かめたいものである。」

(第六号)

とあげてはいるものの、指導自体が観念的で徹底をかくきらいがあったと思う。そうせざるを得なかったのは、いかにして詩を書き続けさせるかが先決問題に思え、どう批評すれば、彼らが次への作

品に力を注げるかとのみ腐心していたように思える。個々の作品についても、たとえば「俺の世界つまり狂人の世界」は、「狂人」ということばを不用意に用いていると思うが、「近代人の苦しみや悩みがよく表現されていて考えさせるものを持っている」と述べたり、あるいは「孤独」では、「部分的であるが現代詩に近づいてきた」といった類のことばで、極力賞讃することに意を注いできている。

しかし、いくらことばで説明しても説明は説明に過ぎず、そのことが直ちに、詩作上、表現上に好結果をもたらすものではない。それよりか、もっと根本的な問題、主観的なことばを避けて即物的に表現させる方法的なもの——想像力、観察力を培うものを考えねばならなかったのではあるまいかと、自らを省りみている。

私の批評以外に、同じ詩集の仲間の作品を取り上げて、検討させたりした。

手編みの娘

女子 25才

今夜も秋風がそうっと忍び込むのを娘は知っているのでしよう
夢中で手編みをしていた顔をそらせ目を閉じて快く迎えている

口元がニコッと笑うと

またカギ針を動かしている
そして器用に動かしているカギ針を見つめる瞳は

楽しい夢の中にはいつているよう

いつしかしなやかな手の中のカギ針は

娘の口づさむ歌のタクトになり

一本のレンガ色の毛糸は

スルスルとセーターの形に調子よく

編まれる

夜も更けたころ

娘は頬にあてた手の冷たさに

窓を閉める

袖のついていないセーターを頭から

スッポリかぶり窓ガラスの中の自分を

無邪気に眺めまわしている

その窓を夜風がノックするのを

知らないふりして

(第四号)

この詩は、表現上の巧拙は別としても、表現そのものが具体的に描かれていて、他の作品と比べてはるかに実感があり、的確にその主題が読む者に伝わる。

こうした具体的な作品を互いの批評活動の中に取り入れさせ、詩作上の具体的な問題を考えさせた。一方、彼ら自身は第五号から鑑賞欄をもうけて、たとえば「冬が来た―高村光太郎」、「一つのメルヘン―中原中也」とか高岡和子の「没前」「無題」などの作品を取り上げて、その分析を試みたりしている。そのせいか、六号あたりから作品に深みをもたせ、詩の感銘を削り上げようという意識的なものが芽生えている。けれど、詩が自己の感情のはけ口としての

域から抜け出ていないのは、どうしようもない。

ここに、強烈な個性の持ち主が彼らの仲間として登場することで、彼らは新しい境地を切り開いていくのである。

冬の夜明けに

原勝政

清々^{すがすが}しい冬の夜明けの櫓^{そり}に乗って

純白のヴェールを翻し翻し、

跳ね踊る馴鹿に引かれながら

東の銀嶺をつたって

愛の歌を口ずさみながらあなたは来ます

その神々しく爽やかな行列を

私はこの檜木の森で見つめます

駆けます駆けます

茶色の子栗鼠はあなたの許へ

愛を秘めた梅壇の実をくわえて駆けます

あなたは優しく頬ずりします

チチチチ チィーヨチィーヨ チチチチ

樵の梢に戯れる鶉や目白が大きな声で

楽しい曲を奏します

(第七号、43、1)

この生徒の作品が、今まで取り上げて来た二人の作品にどのような影響を与えたか、その解明は次稿にゆずりたい。

参考文献

現代詩の鑑賞5 (明治書院)

近代詩から現代詩へ (有精堂)

現代詩作法 (思潮社)

詩の文明批評的性格 (思潮社)

名作に学ぶ (酒井書店)

(広島県因泰寺高等学校教諭)